

## 『ハックルベリ・フィン』における ハックの役割

浅井 静雄

1894年4月、マーク・トゥェーン (Mark Twain) は今まで多額の金をつぎ込んできたジェームズ・ペイジ (James W. Paige) による新型植字機発明の失敗のために、彼の経営していた出版社も財政上経営不能となって破産に追い込まれてしまった。翌年には借金返済のために世界一周の講演旅行に出かけたが、その途中留守に残った長女スージー (Susy) が急死し、トゥェーンは最愛の娘の死に目に会うこともできなかった。1904年には以前から病弱だった妻オリヴィア (Olivia) が死に、1909年彼の死の前年には三女のジーン (Jean) にまで先立たれてしまった。このようにトゥェーンは晩年経済的にも家庭的にも大きな不幸に見舞われているが、このような外的条件が主要な原因となったものか、晩年の彼はペシミストと呼ばれて、人間を呪詛するような暗い諷刺作品を書いたり、西欧諸国による帝国主義的な残虐な行為とか、またそれを支援するキリスト教文明に対して厳しい批判の筆を振っている。

一部批評家によれば、トゥェーンが暗い人生観を抱くようになったのは、1870年上流階級の娘であったオリヴィアを妻にもらい、未開野蛮の西部生まれのトゥェーンが、お上品な伝統の支配する東部の文化的環境に適応しようとして果せず、精神的抑圧を受けたことに始まるとする意見もあるが、<sup>(1)</sup> その当否は別としてトゥェーン晩年の思想が比較的早くから彼の心に根付いていたとする証拠は見受けられる。

トゥェーン自身が自ら “my own gospel” と呼び、彼の思想を最も良く表現している作品に、1906年わずか二百五十部だけ匿名で出版された『人間とは何か』(What Is Man?) がある。これはトゥェーンの代弁者である老人と、一般的な人生観を代表する青年との対話からなる作品だが、これと同じ内容を二十年以上前のある講演会で話をして、その時の聴衆の反応から自分の思想はまだ世の中に受け入れられる時ではないと判断して、以後は口をつぐんできたということが、死後出版された自伝の一部で述べられている。<sup>(2)</sup> 事実『人間とは何か』がトゥェーンの名のもとに広く出版されたのも、彼の死後七年目、彼の暗い人間観も受け入れ易いと思われる第一次大戦のさなか、1917年になってからのことだった。

トゥェーンが最初に彼の思想を表明したとされているのは、1883年の2月、コネティカット州ハートフォードの Monday Evening Club での「幸福とは何か」(“What is Happiness?”)

という講演のことだが、それ以前から彼が友人達に同じ内容の話をしていたという説もある。<sup>(3)</sup> いずれにせよこの時期は、彼の最高傑作である『ハックルベリ・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885)の大部分が書かれた時期と一致しているのだ。とすれば世界中の老若男女によって親しまれているこの作品にも、暗いペシミズムの陰が潜んでいることは予想されてしかるべきだろう。

『ハックルベリ・フィン』の舞台となっているミシシッピ河は、少年時代から水先案内人の時代までトウェーンが深く親しんできた世界であり、四才の頃より過ごしてきた彼の故郷ともいえるハンニバルの村は、作品の背景となっているセント・ピーターズバーグ (St. Petersburg) を始めとするミシシッピ河沿岸の村々のモデルとなっている。そのような少年の頃の思い出深い世界を舞台としてトウェーンの描いたものは、思いの他に暗く陰惨な世界なのだ。それをヤング (Philip Young) は次のように指摘している。

It is well known how the successful Clemens steamed under the pressures of the very respectability he sought and gained, and well known that by 1884 a corrosive despair for humanity, full of evil and duplicity, was beginning to oppress him. In writing Huck's adventures he expressed, among other things, his impatience with the middle-class status he had attained. But it is seldom remarked that in re-creating Hannibal and the river which flowed by it he was extraordinarily conscious of the facts of hideous violence and death, and expressed a horror of them that he had learned as a boy and had never forgot.<sup>(4)</sup>

事実この作品中には、グランジャーフォード家 (the Grangerfords) とシェパードソン家 (the Shepherdsons) の宿怨による惨劇を始め、ウォルター・スコット号 (the Walter Scott) のギャング達の死、ボッグズ (Boggs) 射殺事件、未遂も含めたいくつかのリンチ事件、そして何者かに殺されたハックの父親など、死にまつわる事件がぎわめて多い。まさに死と暴力の世界であり、『ハックルベリ・フィン』は人間性の奥に潜む残酷性の暴露を意図した批判文学といえることができるのだ。その意味でこの作品は、ペシμισティックな晩年の著作と大きな共通点を持っているわけだ。

しかしここで注意したいのは、死と暴力に満ちているはずのこの作品の印象が不思議なほど明るいものになっているということだ。本来なら暗く深刻なものになっていなくてはならないはずのこれらの事件の悲惨さは一体どこへ消えてしまったのだろうか、人はその理由を作品全体にあふれるユーモアのせいだというかもしれない。それならば様々な残酷な事件を、初期の作品に見られるようなバーレスクに墮さしめることなく、充分なリアリティーを保たせているそのユーモアはどこから生じてきたのだろうか。

1876年『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*)を書き終った時点で、トウェーンが友人ハウエルズ (William Dean Howells) に書き送った手紙に次のような箇所がある。

I have finished the story & didn't take the chap beyond boyhood. I believe it would be fatal to do it in any shape but autobiographically—like Gil Blas. I perhaps made a mistake in not writing it in the first person. If I went on, now, & took him into manhood, he would just be like all the one-horse men in literature & the reader would conceive a hearty contempt for him.

By & by I shall take a boy of twelve & run him through life (in the first person) but not Tom Sawyer—he would not be a good character for it.<sup>(5)</sup>

すなわちトウェーンは『トム・ソーヤー』への反省に基づいて、続編『ハックルベリ・フィン』には一人称の語り手としてのハックを登場させることを考えていたわけだ。そして数多くの死にまつわる事件が暗い印象を与えないですんでいるのも、このハックの一人称による語り口に関係があるのだ。

第一にハックは事実を客観的に述べるだけで、事件の悲惨さ、恐ろしさを特に訴えようとはしていない。本来なら彼は語り手であると同時に登場人物でもあるので、事件の現場にじかに身を置いて、もっとも身近にその恐ろしさを感じとることの出来る立場にいるわけだ。したがってその事件の残虐性なりを批判的に読者に訴えるにはもっとも有利な立場でもあるわけだが、その反対に彼はむしろ悲劇そのものから目を背けようとしているようにさえ見える。

例えば難破船のギャング達の死に際してだが、彼らが船と共に沈んでいかなければならない原因は、心ならずも彼らのボートを奪って逃げられないようにしてしまったハック自身にあるというのに、もちろん彼らを助けるためにその後全力を尽したということもあるが、彼らの死を目の前にしてハックは最終的にはわずかにこれだけの感慨しか述べていないのだ。

Well, before long, here comes the wreck, dim and dusky, sliding along down! A kind of cold shiver went through me, and then I struck out for her! She was very deep, and I see in a minute there warn't much chance for anybody being alive in her. I pulled all around her and hollered a little, but there wasn't any answer; all dead still. I felt a little bit heavy-hearted about the gang, but not much, for I reckoned if they could stand it, I could.<sup>(6)</sup>

まあしようがないといった調子のこの文章から、彼が大して深刻になっていないことがわかるだろう。また自分の父親の死をジム (Jim) から聞かされた時も、喜んでいるのか悲しんでいるのか、ハックの気持ちはひとことも語られていない。さすがにグランジャーフォード家とシェパ

ードソン家の悲劇に関しては、せっかく友達になった同年代のバック (Buck) の死を眼下に見せつけられて、次のような嫌悪感を表明してはいる。

All of a sudden, bang! bang! bang! goes three or four guns—the men had slipped around through the woods and come in from behind without their horses! The boys jumped for the river—both of them hurt—and as they swum down the current the men run along the bank shooting at them and singing out, “Kill them, kill them!” It made me so sick I almost fell out of the tree. I ain’t agoing to tell *all* that happened—it would make me sick again if I was to do that. I wished I hadn’t ever come ashore that night, to see such things. I ain’t ever going to get shut of them—lots of times I dream about them.<sup>(7)</sup>

しかしこのような不快感さえも、あの晩岸に上がらなければこんなものを見なくともすんだのだという、悲劇の本質的原因から目を逸らせようとする発言によって、その効果は巧みに弱められている。しかも現場から河に逃げ戻ったバックは、“we was free and safe once more.”とか “I was powerful glad to get away from the feuds.”<sup>(8)</sup> というように、彼の関心は自分の安全性だけだというような発言を繰り返しており、事件そのものに対する感傷は、少なくとも表面的には、この時点ではまったく消え去ってしまっている。

しかもこのような感情を抑えたバックの語り口が、あくまでトゥエーンの意識的な技巧であることは、同じような事件を扱った自伝におけるトゥエーン自身の語り口と比較してみれば簡単にわかることだ。

They took Boggs to a little drug store, the crowd pressing around, just the same, and the whole town following, and I rushed and got a good place at the window, where I was close to him and could see in. They laid him on the floor, and put one large Bible under his head, and opened another one and spread it on his breast—but they tore open his shirt, first, and I seen where one of the bullets went in. He made about a dozen long gasps, his breast lifting the Bible up when he drawed in his breath, and letting it down again when he breathed it out—and after that he laid still; he was dead. Then they pulled his daughter away from him, screaming and crying, and took her off. She was about sixteen, and very sweet and gentle—looking, but awful pale and scared.<sup>(9)</sup>

これは単に悪ふざけをただけのためにシャーバン大佐 (Colonel Sherburn) に射殺されたボグズの死の場面を描いたものだが、ここに述べられているのはバックの見た客観的事実であって、感傷的な言葉はひとこともさしはさまれてはいない。“pale” とか “scared” というのもやはりバックの目にとらえられた事実にすぎない。ところが自伝の文章は次のようになっている。

The shooting down of poor old Smarr in the main street at noonday supplied me with some more dreams; and in them I always saw again the grotesque closing picture—the great family Bible spread open on the profane old man's breast by some thoughtful idiot and rising and sinking to the labored breathings and adding the torture of its leaden weight to the dying struggles. We are curiously made. In all the throng of gaping and sympathetic on-lookers there was not one with common sense enough to perceive that an anvil would have been in better taste there than the Bible, less open to sarcastic criticism and swifter in its atrocious work. In my nightmares I gasped and struggled for breath under the crush of that vask book for many a night.<sup>(10)</sup>

これがボグズ事件を通してトゥエーンの表現したかった本当の気持ちなのだ。ところがハックの口からは、このようなあからさまな非難や批判はまったく聞くことができない。つまり語り手としてのハックの役割は、このようなトゥエーンの批判を表面化させないことにあるのだ。トゥエーンは少年ハックの仮面をかぶることによって、底に批判を隠し持ちながらも、非難もせず、深刻がりもせず、客観的に事実を述べるだけという語り口を採用することによって、事件の悲劇性に対する一つの緩和剤として働かせているわけだ。同時にそれがもう一つの緩和剤であるユーモラスな場面との不調和感なしに、それらの場面をも生かしていると考えることができる。実際『ハックルベリ・フィン』には暗く残虐な面と、面白可笑しい面とが少しの違和感もなく渾然一体となっている。それを可能ならしめているのがハックの語り口であり、そのハックが同時に面白可笑しい面の源泉ともなっているのだ。

ハックは既成の価値感から見れば、何の教育も受けておらず、時代遅れの迷信ばかりを信じる無知な少年であり、その無知をさらけ出すことによって自ら読者の笑いを誘う対象となっている。

The humorous story is told gravely; the teller does his best to conceal the fact that he even dimly suspects that there is anything funny about it...<sup>(11)</sup>

これはユーモラスな話をする時の話し方を語ったトゥエーンの記事だが、ハックについても子供っぽい馬鹿な言動をしながら、そのことに少しも気付いていないという点で、同じパターンが使われている。古ぼけたランプをこすって魔法使いを出そうとしているハック、それも真険にやっている彼の様子を見て読者は笑い、魔法使いが出ないからといってトムは間違っているというハックを見てまた読者は笑うのだ。このように語り手が無知をさらけ出して読者の笑いを誘うのは、処女短編「飛び蛙」(“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”) 以来のトゥエーンの語り口の特徴でもある。

ここで因襲的な価値観とは相入れず、そのための齟齬が笑いを引き起こしているハックの価値

観を見てみることにしよう。ハックは行動するにあたってよく “profit” とか “advantage” があるかどうかということを行っている。例えばお祈りには何の “advantage” もなく役に立たないからそんなものはしないというように。これは自己の利益を規準に行動するということであり、利己主義に通じていく。そしてこの利己主義というのが、

*From his cradle to his grave a man never does a single thing which has any FIRST AND FOREMOST object but one—to secure peace of mind, spiritual comfort, for HIMSELF.<sup>(12)</sup>*

という形で『人間とは何か』の中でトゥエーンの説いている人間観なのだ。この自己の精神的満足以外に人間の行動原理を認めないという彼の考え方が、お上品な伝統に浸っていた当時の平均的なアメリカ人に理解されなかったことも由無きことではない。なにしろトゥエーンは自己犠牲的な愛他精神まで利己主義に還元してしまうのだから。しかし彼は一般に誤解されたように、愛他的な精神そのものの価値まで否定したわけではないのだ。

They did not quite see then that there may be two sorts of selfishness—brutal and divine; that he sacrifices others to himself exemplifies the first, whereas he who sacrifices himself for others personifies the second—the divine contenting of his soul by serving the happiness of his fellow-men.<sup>(13)</sup>

トゥエーンの伝記作者ペイン (Albert Bigelow Pain) はこのように彼の利己主義を弁護している。したがってトゥエーンにも理想とすべき人間像というものはあり、それを目的とした訓戒を次のように述べている。

*Diligently train your ideals upward, and still upward, toward a summit where you will find your chiefest pleasure, in conduct which, while contenting you, will be sure to confer benefits upon your neighbor and the community.<sup>(14)</sup>*

これがトゥエーンの理想だとすれば、クライマックスにおいての地獄へ落ちてでもジムを救おうというハックの有名な決断は、あらゆる人間の行為を律しているとトゥエーンが考える利己主義と決して矛盾しないばかりか、自己の精神的満足を利他的行為に結び付けることに成功しているという点でむしろトゥエーンの理想を体現しているとさえいえるのだ。すなわち『ハックルベリ・フィン』は人間の本性としての利己主義の醜さを様々な事件を通して批判すると同時に、主人公を通してその利己主義の理想的な形を提示していることにもなる。

ところで自ら “my own gospel” と呼んだ『人間とは何か』にこのような訓戒があるということは、ペシミストと呼ばれた晩年のトゥエーンも決して芯からの人間嫌いではなかったという

ことになる。確かに晩年における人間攻撃は苛酷だ。しかしそれも彼の人間愛の裏返しの表現に過ぎないと考えられる。現に彼を個人的に知っていた当時の人々、例えばハウエルズなどは彼のペシミズムを単なるポーズと考えていたようだ。訓戒を与えることで人間の矯正を願う『人間とは何か』の老人も、その老人の理想を自ら体現してみせるハックも、捨て切ることのできないトゥエーンの間への希望という同じ根から生まれたものなのだ。ただそれが人生の絶頂期にあった時の『ハックルベリ・フィン』と、家庭的・経済的苦難を経た後の“the damned human race”に関する一連の著作とでその表現手段が違ったにすぎない。だがその違いこそ作品の価値をも規定してしまっているほどのものなのだ。

トゥエーンの間であり、本来なら彼の代弁者として厳しい人間批判を展開すべきハックが、無知無教養な少年として読者の笑いの対象となっていることはすでに述べた通りだが、そのハックの前で、ハックの観察の対象となる数々の登場人物達が、非難の対象となるべき残酷性と共に、ハック以上のおろかさをさらけ出すことによってやはり読者の笑いの対象となっていることに注意してみよう。実際『ハックルベリ・フィン』の登場人物達がいかにおろかな存在であるかは、彼らが実に頻繁に騙されていることからわかるだろう。ハックの父親の改心に騙される判事もあれば、王様や公爵の詐欺にひっかかる多数大勢もいる。そしてその王様や公爵を含めてハックの嘘に騙されない者はいないのだ。これらの人物のおろかさを借りて、トゥエーンは利己的で残酷にもなりえる人間のさがを批判しているといえる。

ここで読者を筆頭に、次にハック、最下位にハックに批判される登場人物という価値階層ができあがる。ところでトゥエーンの間批判の対象は読者をも含めた人間一般のはずだ。ところが『ハックルベリ・フィン』においてはこの価値階層ゆえに、ハック以下を笑いの対象とする読者自体は批判の対象外にいるような安心感を得られる構造になっている。読者は登場人物のおろかさを笑いながら、自分も同じような欠点を持った人間であることを忘れてしまうというアイロニーが存在しえるのだ。ハックは迷いに迷ったあげく、当時の因襲に逆らって逃亡奴隷ジムの救出を決心するわけだが、読者の時代から見ればハックの行為の正当性は自明のことであり、読者は無教養な少年ハックの立場に身を落としてハックと共に苦しむ必要もなく、優越感をもって彼の行為に拍手を送ることができる。しかしその読者がハックの時代に身を置いた時、果して彼と同じことができるのだろうか。『ハックルベリ・フィン』は人間性への反省を求めるという点で本質的には『人間とは何か』と同じものなのだ。ただトゥエーンがハックという仮面をかぶることによって自らの批判の矛先を柔らげているにすぎない。批判はそれがストレートであればあるほど、その意味も価値も一面的なものになってしまう。ハックの批判の曖昧性こそ『ハックルベリ・フィン』の諷刺に厚みを持たせているものなのだ。「幸福とは何か」の講演を聞いて、人間の尊厳性を傷付けられたと憤慨した Monday Evening Club のメンバーのような反応は、『ハ

ックルベリ・フィン』の読者には無縁のものなのだ。ただ読者にはこの作品を読んで笑いながらも、その笑いの陰に隠されたアイロニーを、またさり気なく語られる事実の裏に垣間見られる同じようなアイロニーを読み取る力が要求されることになる。すなわち『ハックルベリ・フィン』は、トウェーンの真意を読み取るために読者の能力によって様々な読み方が可能であり、それがこの作品を子供から大人まで広く読まれるものにしていく大きな理由なのだ。作品冒頭に付けられた「警告」(“Notice”)の言葉にも同じような多義性が認められる。

Persons attempting to find a motive in this narrative will be prosecuted; persons attempting to find a moral in it will be banished; persons attempting to find a plot in it will be shot.<sup>(15)</sup>

この「警告」の内容はひとことでいえば難かしい読み方はするなということだが、逆にいえばそのような読み方が可能だということをおぼろげに明示していることにもなる。果してこの言葉は、Monday Evening Club におけるような非難を恐れてのトウェーンの正直な気持ちなのだろうか。それとも作者の真意を読み取ってみろという、読者への挑戦の言葉として読まれるべきなのだろうか。

#### 注

- (1) Van Wyck Brooks, *The Ordeal of Mark Twain*, 1920, 参照。
- (2) Bernard DeVoto, ed., *Mark Twain in Eruption*, 1940, 参照。
- (3) Kenneth R. Andrews, *Nook Farm: Mark Twain's Hartford Circle*, 1950, 参照。
- (4) Philip Young, *Ernest Hemingway*, 1952, A Harbnger Book, 1966, p. 224.
- (5) Henry Nash Smith & William M. Gibson, ed., *Mark Twain-Howells Letters*, Harvard Univesity Press, 1960, Vol. I, pp. 91-92.
- (6) Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, A Norton Critical Edition, 1961, p. 63.
- (7) *Ibid.*, p. 94.
- (8) *Ibid.*, p. 95.
- (9) *Ibid.*, p. 116.
- (10) Charles Neider, ed., *The Autobiography of Mark Twain*, Harper & Row, 1959, p. 41.
- (11) Mark Twain, “How to Tell a Story”, *The Complete Essays of Mark Twain*, ed., Charles Neider, Doubleday, 1963, p. 156.
- (12) Mark Twain, *What Is Man? and Other Philosophical Writings*, Iowa-California Edition, 1973, p. 136.
- (13) Albert Bigelow Paine, *Mark Twain: A Biogrphy*, Harper & Erothers, 1912, Vol. II, p. 744.
- (14) *What Is Man? and Other Philosophical Writings*, p. 173.
- (15) *Hucklebrry Finn*, a prefatory notice.